仲本康一郎(2009)「感性の言語学1――オノマトペ再考

**1はじめに**

　オノマトペを備える特徴として、類像性(形式と意味が関連性をもつこと)、身体性(身体的な知覚や運動を反映すること)、全体性(状況や場面を概念化すること)という3つの特徴を提示し認知言語学の観点から考察していく。

**2オノマトペと言語の類像性**

　擬音語･擬態語や感動詞など、恣意性を超えた言語現象のうち、一般に、言語の形式と意味が同型的な対応をなす場合を、言語の類像性といい、そのうち音と意味が直接的な対応を示す現象を音象徴と呼ぶ。ここでは、日本語の音印象を共感覚現象のひとつとして分析する。

**2.1共感覚現象とオノマトペ**

　音には意味があり、環境の中で生じる音と、その原因となる事物や自称は直接的な対応を示す。こういった自然界の音と、外界の出来事との対応は、オノマトペに代表される言語音にも積極的に利用される。

(1)どちらが「ブーバ」でどちらが「キキ」か。

 図1

尋ねられたときに即座に答えられるのではないだろうか。

この場合、　　「キキ」．．．「鋭い」音声

　　　　　　　「ブーバ」．．．「鈍い」音声

それぞれ外界の四客的な映像と対応をなしている。

　知覚は感覚ないで閉じておらず、他の感覚へと拡張していく共感覚という性格を備えている。共感覚については形容詞の共感覚表現が広く知られているが、擬音語・擬態語もさまざまな感覚を聴覚へ写像する共感覚に根ざす現象といえる。

　　　(2)[ｐ，ｂ]…破裂音

[ｋ，ｇ]…かたい表面との感触

[ｓ，ｚ]…摩擦感や障害の欠如

母音では/a/は平面的、/ｉ/は直線的、/ｕ/や/ｏ/はまるい事物

**2.2無声音と有声音**

　無声音と有声音は、発生する音量の違いによって外界との直接的な対応を持つ。

　　(3)a.　無声音：音量小　b.　有声音：音量大

　　(3-1)｛とんとん、どんどん｝と戸をたたく

　　　　｛かんかん、がんがん｝と鐘を鳴らす

　物体の大きさは数量を表すこともある。

　(4)a.　無声音：小さな物、軽量、少量　b.　有声音：大きな物、重量、多量

　(4-1)｛ころころ／ごろごろ｝と玉を転がす

　　　　｛ぱらぱら／ばらばら｝と豆をこぼす

さらに、無声音と有声音は「清音」と「濁音」と呼ばれるように、日本語の場合、評価的な判断と対応することが多い。

(5) a.　無声音：清音　→肯定的な出来事や状態

b.　有声音：濁音　→否定的な出来事や状態

　　(5-1)｛きらきら／ぎらぎら｝と光っている

｛しっとり／じっとり｝とぬれている

**3.　オノマトペと構文効果**

　個々の母音や子音が音節や形態を形成する際、すなわち、それらが全体としてまとまりをなしたとき、個々の素性には還元できない象徴的な意味を生じさせる。

　　(6)基本形「ころころ」→「ころっ」「ころり」「ころん」

これらは認知言語学の観点からは、「構文」的な価値を持っており、意味的には動詞の事象構造やアスペクトに対応する。

**3.1　構文的音象徴：事象構造**

　日本語のオノマトペは「ころころ」CVCV｛（子音+母音）×2}の音声を繰り返すABABを基本形とするものが多い。

　また、アスペクトの観点からみると、「ABっ」「ABり」「ABん」は、運動の形態、特に動きのはやさを表す。

　(7)a.　ABっ：はやい動作　　　b.　ABり：おそい動作

　(7-1)｛からっ、？からり、\*からん｝と空が晴れた。

　　　　　参考）からりと晴れ渡った空

　また、「ABん」は動作の進行ではなく、結果的な状態を表すという特徴がある。

　　　(8)a.　ABAB：進行相　　　　　b.　ABん：結果相

　　　(8-1)a.　おむすびがころころと転がっている

　　　　　b.　おむすびが｛ころん、？ころり、ころっ｝と転がっている

　　　　　参考）木が｛ぽつん、\*ぽつり、ぽつっ｝と立っている

**3.2　アマルガムと統語構造**

　1つのオノマトペで複数の要素のが複合が考えられる場合がある。

　　　(9)「ゆあーん、ゆよーん」(ぶらんこが揺れる様子)

　　　　　　「ゆあーん」←「ゆらり」+「ふわーん」

「構文」として分析されるもうひとつの現象として、オノマトペが要求する接尾辞「と」「に」の違いは、

「と」．．．様態副詞として事態が進行中

「に」．．．結果副詞として事態が結果的な状態にある

ということを表す傾向がある。

　　(10)a.　ぴかぴか｛φ、と、？に｝光る【出来事の様態】

b.　きらきら｛φ、と、？に｝光る

　　　(11)a.　ぴかぴか｛？φ、？と、に｝みがく【出来事の結果】

b.　つるつる｛？φ、？と、に｝みがく

**4.　オノマトペ：身体的言語**

　心理学の観点から、オノマトペは、オノマトペの特徴を行為者が実際に外界の事物を見たり、聞いたり、触ったりといったアクションと関連して知覚される「アクティブな認識の機能」を表す表現とされる。

　　　　(12)「力強く握ること」→「ぐっと握る」

**4.1　オノマトペと言語獲得**

　「ポーン」「トントン」「ゴシゴシ」などのオノマトペは、特定の動作と結びついた身体化された言語である。

　(13)子どもは、「ボール」という名詞を学習する前に、まずボールを「投げる」「転がす」といったある種の特別の操作を通して身体的にボールという事物を認識

→養育者が「ポーンしようね」など子どもに発話することで、そういったアクションとオノマトペが強調的にボールという事物の理解を促進

→「ポーン」に置き換わるものとして「ボール」という語を獲得

小林(1997)

**4.2　からだ的思考と分析的思考**

　喜多(2005)

思考パターンとして、外界の出来事を分析的に捉え、それらを言語によって命題的に表現する「分析的思考」と、言語以前の、いわゆる身体で理解するという「からだ的思考」という二種類のモードがある。

　喜多は、からだ的思考が、身体的な動作や運動だけでなく、表象的な手段とみなされているジェスチャーや言語にも存在すると指摘し、オノマトペ表現は、分析的にではなく、状況の全体を“生のまま”の印象として捉えるものであると述べている。

　　(14)右図　「にょきっとした物体」

　また喜多は、オノマトペ表現は、他の動詞や形容詞のような語彙的概念とは異なり、それらを用いるとき、何らかの身体的運動＝ジェスチャーを伴うと述べている。

　　　(13)「バーンとドアにぶつかった」

「勢いよくドアにぶつかった」

　→録画して観察すると、前者の場合、両手を打ち鳴らすような動作が現れる。

　以上から、オノマトペは、言語的に外界を「表象」するものではなく、身体によって知覚された出来事を直接的に「表出」するということである。

**5.　オノマトペ：全体的言語**

　オノマトペは分析的言語に比べて、単独で具体的な場面を描写する能力を備えている。

**5.1　オノマトペと事象の知覚**

　私たち人間は、つねに外界の音を何らかの「出来事」として知覚するだけでなく、その出来事に関わる対象物の物理的な属性なども同時に知覚している。

　　　(14)破壊音によるカテゴリー化

ビリッ

【紙状の物】

バリッ

【板状の物】

ブチッ

【糸状の物】

ボキッ

【棒状の物】

**5.2　オノマトペと行為の知覚**

　生物体の運動知覚がオノマトペに反映される。

　運動の様態を表すとともに、同時にそこからその主体がどういった属性を持った対象なのか推測される。

　歩行の表現例をあげる。

　　　　（15）「よちよち」【乳幼児がたよりなく歩く様子】

「ふらふら」【病人が揺れながら歩く様子】

「しゃなりしゃなり」【女性が気取って歩く様子】

「のっしのっし」【巨大な存在が威厳をもって歩く様子】

　また人間の動作や運動は、何らかの意図や感情の発露、またその実現として理解される傾向がある。

　　　(16)「とぼとぼ」【何らかに落胆して家路に向かう様子】

　　　　　「つかつか」【何かの用事があって目的地へ向かって勢いよく歩いていく様子】

　認知言語学の観点からこれらの擬態語を表示するならば、「よちよち」は主体が、「ぶらぶら」は目的が、「とぼとぼ」は感情が擬態語に五位下されたものとして表示することができる。

**6.　まとめと今後について**

　以上から仲本は、認知言語学の観点からオノマトペの特徴を分析した。第一に、オノマトペが示す形式と意味の類像性を、共感覚現象及び構文効果として分析した。これらの分析により、音声的な特性に基づく素性的音象徴と、形態的･統語的な構文的音象徴の二種が、従来までの音象徴現象にあることを示した。第二に、擬音語・擬態語が持つ認識機能を、言語の身体性として整理し、オノマトペの持つ情報処理的な意義を指摘した。第三に、オノマトペの状況喚起力を、事象の知覚と行為の知覚という二つの現象として述べた。最後に、認知言語学に基づく分析法を提案した。

　仲本が述べているように、本稿では、オノマトペによるメタファー現象とそれを可能にする概念メタファーやイメージ図式については言及されていなかった。外界からの情報をオノマトペで表現するまでに、どうしても対話者同士の心理状況が関わってくると考えるので、次回はその点からも調べていきたい。

【参考資料】

仲本康一郎(2009)「感性の言語学1――オノマトペ再考」（『 山梨大学留学生センター研究紀要 5, 3-14, 2010-03-26』）